

# 左官職人 — 竹下勝美 [後編]

東京駅・丸の内駅舎の保存・復原工事に  
擬石職人として参加した竹下勝美。

今では用いられる機会が少ない左官技術を  
復活させる場でもあった今回の現場で竹下が果たした役割  
技術の伝授や道具へのこだわりについて語ってもらった。



竹下の仕事ぶりを、若手の藤本が見つめる。今回の工事を契機として顧みられ、次世代に伝えられた技術は数多い。



曲線的な形の「持ち送り」など、窓周りには複雑な部材が多い

## 駅舎復原で、技術も「復原」された

一日あたりの乗降者数約七六万人という一大ターミナル駅でありながら、国指定の重要文化財でもある東京駅丸の内駅舎。その保存・復原工事では、駅舎を創建時の姿に戻すにあたって、現存していない部分をできる限り当時のものに近い形で再現する、という方針が掲げられている。

駅舎外壁の装飾の一つ「擬石」についても、当時から残存部分を綿密に調査した上で、消石灰・花崗岩の種石・珪藻土といった材料の配合まで検討し、より忠実な復原を心がけた。

「私の若い頃は丸の内界限を始め、数多くのビルの擬石洗い出しをやりましたよ。商工会議所とか、四、五年前には早稲田の大隈講堂の復元もやったかな。でもこのところは減りましたね。丸一年くらいやらないこともありますから」最近では使われる機会がめっきり少なくなつたという擬石の施工。左官職人・竹下勝美は、工事が始まる前にまず高橋工業所に向き、多くの職人に指導した。高橋工業所は、今回の工事で外壁の洗い出しと化粧レンガのタイル下地を担当した会社である。

「三カ月くらいですかね。まだ残っていた部材があったのでそれを見たり、あとはJ.V.からもらった図面なんかを参考にして、会社（高橋工業所）でずいぶん作りました。現場に来てるのは、そうやって技術を身につけた人たちです」次代の育成が順調とは言いがたいのは他の職と同様で、三〇歳くらいの人はそれなりにいるが、これから左官を始めようという人が少ない。「（擬石の）仕事がないからやらない。やらなから覚えられない。悪循環です。でも、今回の工事で大いぶ覚えられたんじゃないですか」現場に出る前に会社で三〇人くらいに教えましたけど、練習でいくらできるようなになってあまり身にならないんです。現場で実際にやって覚えなないと。特に東京駅なんかずっと残

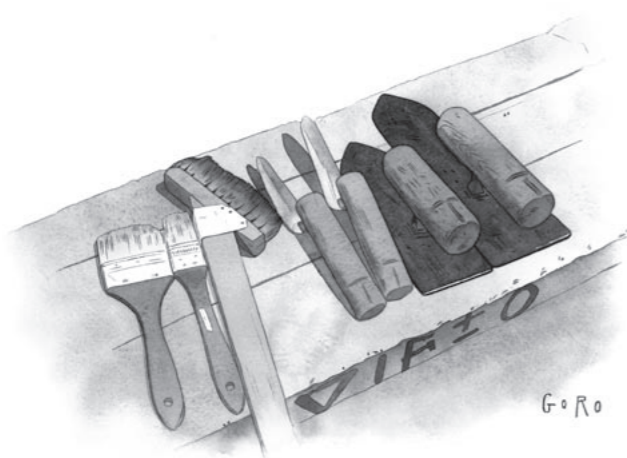




たけした・かつみ ●1944 (昭和19)年、島根県生まれ。農家に育ち、新制中学卒業後に上京して左官工に弟子入り。四年の修業を経て左官職人となり、オフィスビル・マンションなど比較的大規模な建物の現場を数多く手掛ける。今回の駅舎保存・復原工事では、在籍する池本工業から高橋工業所に出向し、施工と技術指導を行った。

「絶対ミスできないと思えば  
みんな必死でやる。  
それで身についた技術が  
本物になる」

「『人造刷毛』といって一般の刷毛とは違うもので、みんな持ってないんですよ。それに刷毛が違うと仕上がりが違ってきますから」  
このあたりは、文化財建築における施工の意識を統一する話とも相通する部分だろう。  
「常に人に見られていることを忘れず」  
仕事をする時に心がけていることは？



今回の擬石施工用に用意された刷毛や鏝など



右/日本建築の「破風(はふ)」にあたる「ペディメント」。古代ギリシャ神殿などに見られる建築様式の一つで、丸の内駅舎では窓の上の装飾に用いられている。  
左/木枠を使い、擬石を狂いなく整形していく。鏝にも、広い部分を塗るものや表面を仕上げるものなど多くの種類がある。

るもので、一つのミスも許されないんだから、そりゃあみんな緊張感もって必死でやりますよ。そうして覚えて初めて自分の技になる」  
竹下の手ほどきを受け、廃れつつあった擬石の施工を多くの職人が経験した。丸の内駅舎を保存・復原する現場は、希少な技術を後世に受け継ぐ場という一面もあったようだ。

### 全てが現場施工、そして道具も自作

実際に現場に出て、擬石施工の作業を見せてもらった。窓の周りの「ペディメント」や「持ち送り」など複雑な形状の部材は、木で作った型を使うこともある。その型もほとんどが竹下の自作。この時も、練った材料を木の枠に沿って盛り、鏝で巧みに形を整えられていった。

「当初は、複雑な部分は会社で下地だけでも作って、それを持ってきてつける方法も考えたんですけど、これだけ入り組んだ現場でしょ。石みたいにしつかりしたものならいいけど、重くて厚みのない擬石をその場所まで持って行けない、と。だから今回の擬石は全部現場で作ってます」

工事最盛期は駅舎全体が外部足場で覆われ、その内部は狭い迷路のような状態。そこに壊れやすい擬石の部材を運び込むのはリスクが高すぎた。

「昔の部材を見ると、どうやってやったんだろうかと思えますね。型を作るにしても、今みたいなベニヤなんてないから、自分で木を削り出すしかなかったと思うんですよ。昔の人はよくやったなあ」と

話をしながらも、鏝を操る手は全くよどみがない。見る間に赤レンガ壁を縁取る潇洒な装飾が形作られていく。

竹下と一緒に作業をする若い職人・藤本に師匠の仕事ぶりを聞くと、

「やっぱり細かい部分はさすがというか、うまくいいますよね。あとは集中力が続く時間がすごく長い」

失敗できない目立つ部分の施工、しかも複雑な部分では、一つ一つの部材ごとに何カ月にもわたって地道な作業を続けなければならぬ。

一方、今回の工事では、用いられる機会が少ない擬石施工のために数多くの道具が製作された。

「これ、俗に『人造鏝』というんです。石というのとは、平らなところも、とがったところもある。最後に表面をこれですらして向きをそろえたり、隙間なく敷き詰めたりするんです」

また、「洗い出し」の際に使う刷毛についても、この工事のために注文し、二社の施工業者で同じ道具を使用した。

「いつも人が見てると思って仕事してますね。恥ずかしい仕事はできない、というのもあるけど、自分だけがいいと思って一人よがりになってないかとか。誰だって人に見られながらじゃやりにくいけど、これがためになるんです」  
「見られていることを意識する」。人目につく外壁部分を手がける左官職人だからこそ、の心構えなのかも知れない。